

序

言うまでもないことだが、医学・医療は、日進月歩で変化している。よりよい医療を患者さんのため提供するには、新しい知見に基づいた薬剤の使い方に習熟する必要がある。新薬の情報や、新しい研究結果、ガイドラインを常にチェックできればよいが、他にも研修すべきことが山ほどある研修医が効率よく学ぶためにはどのような書籍がよいのか。

そんなニーズに応えるべく2009年に発行されたレジデントノート増刊「日常診療での薬の選び方・使い方～日頃の疑問に答えます～」であるが、上梓後、高評価をいただいたと伺った。しかし、発行以来5年半が経ち、新薬が出て、さまざまなガイドライン改訂などアップデートが必要となってきた。今回、僭越ながら総編集の大役を引き受けることとなったが、前回と同様、研修医指導の経験が豊富な日本を代表する総合診療や各分野のエキスパートによる、経験の少ない研修医のために、読んですぐに処方できるようなわかりやすく使えるコツを明示した内容にまとまっている。新しい情報もしっかり取り入れているが、「新薬」＝「良薬」とは限らない。「新薬に飛びつかないけど新しい情報 (update) はしっかり」という点も今回の編集にあたっての基本コンセプトとした。

内容は、情報の羅列ではなく、現場感覚・実践を重視したものであり、経験豊富な医師の思考プロセスがわかるよう処方に至る考え方がわかるものとしている。また、疾患の治療だけでなく、同じような臨床効果をもつ薬の使い分け (NSAIDs と COX-2 阻害薬の使い分けや降圧薬、経口血糖降下薬の使い分けなど) や患者さんの症状に対する処方 (咳や消化器症状に対する処方) など研修医が現場で特に困ることがあるが、ガイドラインなどではよくわからないことにも配慮した内容となっている。研修医指導を日頃行っている医師だからこそ書くことのできるコツ・知恵も随所にみることができると思う。

今回俎上に載せた対象疾患は、多岐にわたっており章立ては呼吸器、循環器、消化器、腎・内分泌・代謝、血液・腫瘍、皮膚・リウマチ、精神神経疾患、抗菌薬に大きくは分かれる。さらにこの分野を疾患、症状ごとに分けて解説している。また、基本的な薬剤だけでなく、後期研修医では必要な知識の1つになりうる専門性の高い薬も一部取り上げている。

また、今回取り上げたテーマは、外来、入院、救急といった診療場所によって異なる薬剤の使い方についても言及している。例えば、呼吸器疾患で代表的な慢性疾患である慢性閉塞性肺疾患については、外来診療を中心とした薬剤の使い方を取り上げ、気管支喘息については、外来のみならず入院管理についても、また、軽症であるが対処療法の

ニーズの高い「咳」に関しては、よく使われている漢方薬の使い方も含め、解説している。循環器領域では、外来診療が大きなウエイトをもつ高血圧症に対する薬物療法から、不整脈の対応やカテコラミンの使用法といった入院管理で重要かつ、緊急性を要する事例に対して読んですぐに使えるような内容となっている。救急の分野では、急性期の疼痛管理から気道管理での鎮痛目的まで幅広く使われるようになったフェンタニルについて、実際のケースを想定して解説、また、外傷に対する感染症対策では、抗菌薬のみならず、破傷風予防に関しても Advanced Lecture として解説されている。感染症の分野では、入院適応となりうる疾患に対して経静脈的に使用する抗菌薬のみならず、外来で必要となる経口抗菌薬についても解説がある。これも病院での研修では入院管理での抗菌薬投与に関する知識に偏りがちな研修医のニーズに応えるものと思う。

幅広い診療をカバーする欲張った内容の本著であるが、構成を統一しながらも、著者の診療に対するこだわりが存分に味わえる実践的なテキストになっていると私は実感している。研修医対象がコンセプトであるが、上級医でも楽しめる内容も豊富であると思う。さまざまなテーマを取り扱っている「レジデントノート」であるが、この「増刊」での内容が、毎月のレジデントノートを購読されている読者の皆様のニーズを捉え、ご意見を十分に反映したものになっていることを期待しており、読者の臨床実践がよりよい患者ケアにつながるものと思っている。

最後に、多忙な臨床のなか、原稿執筆を快く引き受けていただいた著者・編者の皆様、頼りない総編集者をサポートいただいた羊土社の皆様に感謝申し上げます。

2015年2月

編者を代表して

沖縄県立中部病院プライマリケア・総合内科

本村和久